205 長崎郵趣
2023. 5. 21

遠藤周作生誕100年　伊東弘章

遠藤周作生誕100年

沈黙と好奇心の旅へようこそ～

遠藤周作　(1923-1996)

1923（大正12）年3月27日、東京生れ。幼年期を旧満州大連で過ごし、神戸に帰国後、12歳でカトリックの洗礼を受ける。慶応大学仏文科卒。フランス留学を経て、1955（昭和30）年「白い人」で芥川賞を受賞。

一貫して日本の精神風土とキリスト教の問題を追究する一方、ユーモア作品、歴史小説も多数ある。主な作品は『海と毒薬』『沈黙』『イエスの生涯』『侍』『スキャンダル』等。1995（平成7）年、文化勲章受章。

沈黙と好奇心の旅へようこそ

伊東　弘章

令和5年3月27日，この日は小説『沈黙』『深い河』などで知られ，長崎にゆかりが深い作家，遠藤周作（1923～96年）生誕100年を記念して式典が長崎市・外海地区にある遠藤周作文学館で開催された。遠藤氏の長男・龍之介らのテープカットで特別企画展も始まった。

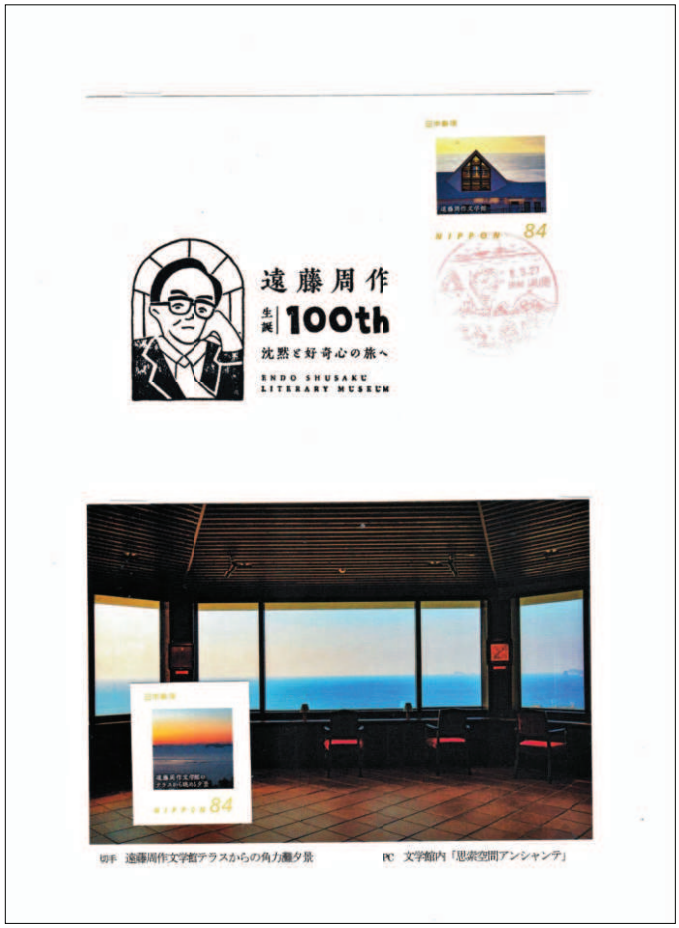
また生誕100年を記念する同文学館限定版と県南地区郵便局と2種類の記念フレーム切手が発売された。

遠藤周作の代表作『沈黙』の原作未読のまま，2016年公開の米映画『沈黙　―サイレンス―　』を鑑賞し，沈黙とは・・を知った次第。沈黙の舞台は江戸時代初期，幕府による激しいキリシタン弾圧下の長崎・外海地域。

映画では「トモギ村」として登場。日本で捕えられ棄教したとされる高名な宣教師を追い，弟子のRとGの二人は日本人キチジローの手引きでマカオから長崎へと潜入する。彼らが目にしたのは，想像を絶する幕府のキリシタン弾圧の光景・・。

驚愕しつつも，弾圧を逃れた“隠れキリシタン”と呼ばれる村人（日本人）らと出会う。幕府の弾圧は厳しさを増し，ついにRとGも囚われの身に・・長崎奉行代官が，二人に棄教を迫るなか村人は次々と犠牲に。守るは信念か，弱々しい命か？ 神（イエス）に問うても 神は沈黙・・。

そして 神は今でも・・・



長崎との関わり

狐狸庵先生こと遠藤周作は、戦後から平成にかけて活躍した小説家。学生時代に洗礼を受けてカトリック教徒になったため、作品には宗教をテーマにしたものが多くある。文学を通じて日本の精神風土とキリスト教について追究し、多くの作品を残しています。長崎との関わりで、外海は小説『沈黙』に登場する「トモギ村」のモデルになった一つになっている。遠藤周作は小説を書く前から長崎を何度も取材で訪れ、生前には小説を思い起こす小高い丘に「沈黙の碑」が建立された。のちに遠藤周作はこの地を、「神様が僕のためにとっておいてくれた場所」と話している。
また南山手の大浦天主堂にも数回、足を運んで取材をしています。

長崎にご滞在中の狐狸庵先生（1984）

長崎・大浦天主堂

こりゃ！ いかんわ～ ・・狐狸庵先生

遠藤周作文学館

遠藤周作の没後、彼の文学や人間を語るのにふさわしいロケーションということで外海（長崎市東出津町）に建設されました。遠藤周作の遺品や生原稿、蔵書などが展示されています。

ステンドグラス

文学館のエントランス

文学館のキャラクター

文学館の外観

展示室（書斎コーナー）

思索空間アシャンテ

PC 遠藤周作文学館

遠藤文学を次世代に

長崎新聞

山陰 新聞 2023年（令和5年）3月28日 火曜日 紙面編集・柿野朋之

遠藤文学を次世代に

生誕100年記念

生涯たどり 感謝のミサも

長崎市東出津町の市遠藤周作文学館で27日午前、遠藤の生誕100年記念式典が開かれ、田上富久市長や遠藤の長男龍之介さん(66)らが特別企画展のテープカットを行った。午後には、ファンや親交があった人らでつくる「周作クラブ長崎」（高尾亨代表幹人）が同市西出津町の出津教会で記念ミサを執り行い、遠藤と妻順子さん（2021年、93歳で死去）に感謝の祈りをささげた。

遠藤は1923年3月27日、東京生まれ。55年（昭和30年）に洗礼を受けカトリック信者で「沈黙」「深い河」など宗教をテーマにした多くの名作を発表、96年、73歳で死去。「沈黙」の舞台となった旧長崎県外海町に2000年、文学館が開館した。

特別企画展は市の記念事業の一環。式典には遺族や、夫妻と親交があった人、研究者らが参列。龍之介さんは「父はとあることに長崎を『第二の故郷』と言っていた。（同展を）多くの人に見てもらい、父のことを思い出してもらえれば」と笑いかけつつ、田上市長は遠藤と順子さんの遺影が飾られた中で、「悲しみに苦しんだ人間の悲しみ、苦しんだ心を寄せた遠藤文学が、どうか次世代に引き継がれていきますように」などと祈りをささげた。（山口恭祐）

遠藤と妻順子さんの遺影を飾って執り行われたミサ＝長崎市、出津教会（西本翔撮影）

展示を見ながら語り合う遠藤龍之介さん（右）と

いい皆さんに、ぜひ来てほしい」と期待を述べた。

同展は「沈黙」など代表的な作品を柱に生涯と文学を紹介。コーナーでは、エッセーなど多彩な作品群や没後の動きにも触れ、人間的魅力を発信している。この日は初公開となる、初期の代表作「狐と薔薇」の生原稿などに、参列者らが熱心に見入っていた。開催は来年9月26日まで。

一方、出津教会であったシンポジウムのミサには、式典の参加者や信者ら約80人が参列。花に囲まれた遠藤と順子さんの遺影が飾られた中で、「悲しみに苦しんだ人間の悲しみ、苦しんだ心を寄せた遠藤文学が、どうか次世代に引き継がれていきますように」などと祈りをささげた。（山口恭祐）